孤独な独裁者

黒江達

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
孤独な独裁者

【Ｎコード】
Ｎ４９３４Ｔ

【作者名】
黒江達

【あらすじ】
独裁者が抱いた孤独と考えについて。

空は一面雲に覆われいて、静かに雨が降る午後だった。会議室はどんよりとした外の天気よりもさらに重苦しい空気に包まれていた。
「では、手筈通りに」
長テーブルの上座にいた老境に差し掛かろうかという男が沈痛な面持ちで決断を下す。彼はこの国を統べる独裁者であった。
「はい……」
テーブルについていた他の人間たちはこれまた深刻な表情で頷き、やがて解散の合図によって思い思いの方向へと散らばっていった。
独裁者はこの会議で長年の盟友の粛清を決めたのであった。それは実に重い決断ではあったが、彼にとって初めてのことではなかった。

自室に戻った独裁者は用意させたお茶を啜ると窓辺に腰掛け、外の風景を見ながら物思いに耽った。
（やらなければこちらが、ひいてはこの国が危ういのだ……）
彼はそんな言葉で自分を納得させた。
実際のところ、彼の直感は間違っていなかった。かつての盟友は自分の信念に殉じるあまり、再びこの国へ混乱を呼び起こす可能性が高かった。その上、彼の周りにはその理想に同調したり、それを利用しようとする人間が集まり過ぎた。
これを取り除かねば独裁者がかつて戦った不毛な対立や血で血を洗う争乱が引き起こされることは目に見えていた。
（今は――崇高な理想よりも強い指導力が必要なのだ……）
独裁者は盟友の理想をよく理解していた。昔は自分もそういったものを持っていた――そして今も持っているのだが、現実的には今のこの国では不可能であるということも痛感していた。
理想の実現には国を豊かにし、人々にそれ相応の教育を施さねば

なるまい。そのためには遅々として進まぬ衆愚政治を一掃して独裁を行いこの国の政治が自分の手足のごとく動く必要があると独裁者は思っていた。

そして彼の強固な意志のもとにかつてないほどの改革が行われてきたことも事実であった。

（故に――粛清せねばなるまい）

独裁者はふと意識を外の景色に戻した。するといつの間にか雨は止んでいた。相変わらずの曇り空で晴れ間は一寸も覗いていなかったが……

彼は付け髭とカツラ、そして目深に被れる帽子を用意した。そしてそれらを身につけると執務室の非常口からそっとお忍びの散歩に出た。

独裁者にとって時々の散歩は数少ない彼にとっての気晴らしだった。彼は用心深く蝙蝠傘を用意し、そろりそろりと公邸を出た。

外に出てしまえば変装した独裁者に気付くものは誰もいない。若き日の彼が敗戦の憂き目に遭った時、あるいは当局から逃れるために駆使した変装術は今でも健在であった。

通りを抜けて噴水のある広場へと独裁者は向かった。空模様はやはり優れなかったが、雨が降ってこないのは幸いだった。広場にはベンチがいくつかあり、彼もそのひとつに腰掛ける。

公邸での執務は日々忙しく今日のように憂鬱なことはあれど概ね有意義なものだったが、こうして誰にも気兼ねせずに外の空気を吸うことは大いに安らぐことだった。

方々に据えられたベンチには独裁者の他に、雨が上がったのを見計らってか恋人と見える男女二人組が寄り添っていたり、親友なのだろうか、熱っぽく語り合う男二人が座っていた。

独裁者はそれらを見渡すと急に寂寥感に襲われた。今日、粛清を決めた彼の盟友もかつてはあそこに座る人間たちと同じように自らと話したことを思い出した。

独裁者は会議で下した冷酷な決定――そして、その時に発した自

分の声の響きを思い出してゾッとした。
（だが――しかし、あれは必要なことだった）
彼は心の中でそう自己弁護した。
この独裁者は今まで様々な人物を粛清し、葬り去ってきた。敵や批判的な者は言うに及ばず無能な者、裏切り者、方針を違えた味方、そして共に戦ってきた盟友の幾人かさえも。
（私は実に残酷な人間であることは疑いようがない――）
その時、親友同士と思われる二人組の方から秘密警察が耳にすればしょっ引かれそうな危うい政治談議が聞こえた。
独裁者は苦笑いしながら若さとはああいうものであったろうかと懐かしんだ。
（若さ――そうだ。彼らは若い。そして私のような残虐な人間を悪魔のように思うこと間違いない。だが、彼らの内の幾人が親友と共に戦いをくぐり抜け、また、大事業を成すことが出来るのだろうか。友に命を預け、そして自らも友の命を預かる。そして、凡人が生涯手にしえないほどの権力や富を分かち合い、あるいは奪いあうことなどあるのだろうか。しかもそれを私のように老いる時まで続けることはあるというのか。大抵の場合はせいぜい若いうちに恋愛だの友情だの、青春小説にでも出てくるような出来事をいくつかこなすのが関の山だろう。そして大人になるにつれて生活と労働に時間を奪われ、月に数回、いや一年のうちに数えるほどしか親友と会わなくなる。そうすれば数少ない逢瀬は私がくぐり抜けてきた修羅場や決闘じみた対決などとは程遠く、ただ旧懐を温めるだけの時間に成り下がる。彼らが夢見て止まぬ、そして現実にあった時にはその存在を一寸も疑わぬ友情というものは圧倒的な時間と交流の不足によって強固になっているだけなのだ。そしてその永続的な窮乏をまるで宝物のように抱きかかえて後生大事にしているに過ぎない……）
そうして独裁者の意識は思索の世界から曇天の下へと舞い戻った。彼は手に雨が当たっているのを認めた。
雨は再び降り出していた。独裁者が辺りを見渡すといつの間にか

広場のベンチに座っているのは彼一人だった。周りには傘をさして足早に通り過ぎる人間がわずかにいるだけ。

独裁者はどうしようもない孤独を胸に空を見上げ、どこからとなく現れる雨粒を確認した。そして彼は蝙蝠傘を開いて再び歩きだすのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4934t/

孤独な独裁者

2011年5月23日05時55分発行